

忘れられた異人さん
多くの若者を育んだ
フリッツ・カルシュ
松江での日々と
日本の想い

若松秀俊編

カルシュ先生は幼少の頃、まだ見たことのなかった

大山の夢を

何度も見たとのことだいせんです。

人の世の縁えにしの不思議を感じる言葉です。

きつとこの景色が

最も好きだったのでしょう。



(フリッツ・カルシュ自筆画)

中海の向こうに見える雄峰大山

目次

まえがき	14	若松秀俊
序 章 今なぜカルシ博士なのか？	17	
第一章 私とカルシ博士との出会い	18	
第二章 フリッツ・カルシ博士の生涯	27	
第三章 カルシ先生の足跡	33	
三・一 日本との出会い	33	
三・二 旧制松江高等学校ドイツ語教師として	36	
三・三 外交官として	41	
第四章 家族との生活	42	
四・一 メヒテルトの言葉	42	
四・二 松江での生活	43	
四・三 横浜 東京での生活	44	
四・四 戦後の日本での生活	48	
四・五 帰国後の家族三人の生活	49	

四・六 メヒテルトのアメリカでの生活	52	
第五章 学問と著述	55	
五・一 恩師 ハルトマン	55	
五・二 カルシ氏の学術業績	56	
五・三 人智学とシタイナー	59	
第六章 カルシ氏と生徒達	63	
六・一 変な外人さん	64	
六・二 フラアゲン	65	
六・三 カルシ先生との初対面	68	
六・四 シムパーレンゲイア	70	
六・五 光は東方より	74	
六・六 ナチヨナーレクライドウナ	76	
六・七 強行軍	77	
六・八 もつけた	79	
六・九 学園祭の時	80	
第七章 カルシ先生のドイツ語	83	
七・一 厳ししフラーゲ先生	83	

八二 家を壊したカルシュ先生	136
八三 ウッドマン先生の令嬢たち	137
第九章 同僚や学者との交流	141
九一 ドイツ語の教師	141
九二 高橋敬視先生	143
九三 独逸語教授 小林松次郎先生	146
九四 独逸語教授 原田和三郎先生	150
九五 藤野義夫先生 井坂清先生	151
九六 独逸語教授 藤野義夫先生	152
九七 禅と西田哲学との接触	153
第十章 日本を去るに臨んで思ふ	155
第十一章 カルシュ先生以後のドイツ語	162
第十二章 再会、カルシュ先生を迎えて	167
十二一 八年後のカルシュ先生と夫妻	168
十二二 縁者との交流	169
十二三 カルシュ先生との再会	170
十二四 三回目の出会い	172

七二 拳骨教育	84
七三 プラーゲ先生の小言	86
七四 カルシュ先生との四回の出会い	88
七五 カルシュ先生の思い出	90
七六 カルシュ先生とギルソン先生	92
七七 カルシュ先生の講義	94
(一) シュトワーフェンウイゼとシナルゲンウイゼ	94
(二) ヴァスィストダスターザイン?	95
(三) カルシュ先生の授業	96
(四) マルプスの逸話	97
七八 ハーマン教授の思い出	100
七九 校仲間のドイツ語の思い出	101
七十 見つけた講義録	104
七十一 六十二年前のカルシュ先生	119
七十二 カルシュ先生とエド豆	121
第八章 カルシュ家周囲の人々	128
八一 異人館の人達	129

十一五 師遠きより来たるまた楽しからずや	173
十一六 カルシュ先生を迎えて	176
十一七 カルシュ先生を案内して	178
(一) 十月七日 奥谷の万寿寺	178
(二) 魚一の団欒歓迎会	180
(三) 十月八日 大社参拝	185
十一八 報道 各地での歓迎	193
第十三章 再会後の同窓会との交流	196
十三・一 カツセルへの訪問	197
十三・二 メヒアルト女史の日本再訪問	199
十三・三 カルシュ先生と田島君	207
十三・四 メヒアルトさんを訪ねて	208
十三・五 カルシュ先生の思い出	210
第十四章 カルシュ先生の追悼	213
第十五章 日本の文化の影響	217
十五・一 学問を通して	217
十五・二 ヨーロッパの窓口として	219

第十六章 高校生の頃	220
十六・一 高校時代の思い出	221
十六・二 松江高校同盟休校	231
十六・三 昭和六年同盟休校	232
十六・三 勉強よりも運動	240
第十七章 カルシュ門下の人々と波及効果	248
十七・一 学術界へ	249
(一) レタ開発の功労者	249
(二) 俳諧の研究を生涯を通して	251
(三) ワクチン生産の功績者	252
(四) カルシュ先生のお蔭	254
十七・二 実業界へ	257
(一) ビジネスセミナー	258
(二) 松江高等学校と私	264
(三) カルシュ先生断想	270
十七・三 政界へ	272
(一) 硬骨漢政治家	272

(二) 懐かしのカルシュ先生(仮題)	274
(三) 高校中退の秀才	274
十七四 法曹界 社会活動へ	275
(一) カルシュ先生との触れ合い	275
(二) 奇人の永井君	277
第十八章 浜校を思い出す座談会	288
十八・一 何故松江高等学校を志願したか	288
十八・二 数学について	290
十八・三 その他忘れられぬ字課について	291
十八四 恩師についての回想	292
十八五 物故クラススタートを偲んで	295
十八六 自習寮と下宿の話	299
十八七 運動部の回顧	301
十八八 左翼風潮の所産的出来事について	303
十八九 三回経験した記念祭物語	306
十八十 大学進学とその後について	308
第十九章 旧制高等学校への想い	311

十九・一 松江高等学校寮歌	314
十九・二 ああ旧制高校！ 友よ！ 恩師よ！	316
十九・三 私も旧制高校生でした	317
あとがき	318
調査協力者の言葉	320
付録	327
A・一 最初の手掛かり	327
A・二 カルシュ顕彰の一步	328
A・三 資料公開の許可	331
A・四 編者によるドイツ人への協力呼びかけ	335
参考文献	344
一 薈のふもとに(旧制松江高等学校校史)	344
二 翠松 旧制松江高校同窓会報 数回/年発行)	344
三 大阪支部会報松友	345
四 東京松高会報	345
五 カルシュ旧生徒の手記	346
六 カルシュ講義録	346

七 資料	346
八 家族の証言	346
九 同窓会員名簿	346
十 関連著書	346
カルシュ家の人々	347
カルシュ家の歴史	348
薫陶を受けた著名人	349
著名なエンメラの縁者	350
マルブルクでのカルシュ夫妻の住所	350
カルシュ顕彰に関する最近の報道記事	350
ドイツ・マルブルク略図	352
情報入手源	352
官庁・公的機関など	352
制官林松江高等学校(カルシュ旧生徒)	352
旧制松江高等学校生徒および関係者	354
カルシュ氏関連報道	356

まえがき

ほんの偶然からドイツで一人の女性と出会ったことが私を大きく変えた。「袖すり合うも他生の縁」と言つが、全く縁もゆかりもない、存在すら知らなかったカルシュ博士を、今こつして紹介する立場になったことの因縁の不思議さをしみじみと思つ。カルシュ博士の調査では焦点を絞ると殆ど確実に必要な情報と、偶然ではあるが同時に関連情報が手に入るその不思議さを味わつた。調査のなかで、多くの人々が自然な形で協力の輪を広げてくれたことに、いま心より感謝している。筆者は一九七二〜一九七五年にドイツ学術交流会の奨学生としてドイツ政府より給費を受け、エルランゲン・ニュルンベルグ大学医学部の第一生理学教室でバイオサイバネティクスに関する研究をカイデル教授とプラティヒ教授のもとで行つた。ドイツの文化とそれを生んだ風土に若き日に触れる機会をドイツから与えられた筆者が、ドイツでの国際会議の時期に偶然にもカルシュ博士の娘さんに出会つ

¹現在のバイオサイバネティクス研究所である。当時はZDF (Zweites Deutsches Fernsehen) をリーダーとする聴覚生理学の中心であった。彼は学術雑誌「Biofeedback」の編集長であった。

て、この仕事に携わることになったのを、筆者に賜った天命と考えている。

筆者はシステム工学をもともと専門としており、縁あって生物・医学をこの立場から三十年近く体系的に研究してきた。若き日に東京大学の水島生化学教授の講演に感動し、生体工学に興味を持ってシステム工学を専門とする横浜国立大学の関口隆教授のもとで学んだことが、ドイツ留学に連なり、生体機能の制御や医療機器の開発に繋がった。現在、医学系大学院所員であるが、研究室は医学部出身以外に電気工学、電子情報工学、金属熱工学、化学工学、物理学、農学など他大学他学部出身の、また外国人の大学院生を容し、外国人との研究も積極的に行っている。カルシュ博士の調査をしながら、学生時代に横浜国大の阿部賀隆教授に筆者のドイツに対する興味からゲルマニストに転向を勧められたことを時に思い出す。全く見も知らなかったカルシュ博士に偶然出会って以来、種々の施設を訪ね調査を行っている間に、思わぬ人に出会うこともしばしばであった。そうした出会いが自分の人生の中でどれほど重要な意味をもって来たのか、またこれから意味をもつのかを考えてきた。いろいろとまどいもあつたが、ロマンと楽しさを感じるものであつた。

序 章 今なぜカルシユ博士なのか？

カルシユ博士の存在を偶然に知り、僅かな手掛かりを辿って事実を発掘し、彼の足跡を追跡する中で筆者は彼の偉大さを知った。カルシユ博士は直接・間接に接したことのある人以外には誰も彼を知らないほど、日本では残念ながら名の無い哲学者である。だからといって評価に値しないわけではないと思っている。したがって、いまなぜカルシユ博士なのかといえ、それは隠れたまたは紛れた彼の功績を発掘しまとめておき、同時に彼の縁者が元氣なうちに少しでも多くの生の声を収録しておきたいからなのである。実際に、縁者達も自分が元氣なうちに統

一的に記録して置かなければ、遠からずして、すべての記憶が消滅する運命にあると心配している。これまで彼の縁者以外で、客観的な資料をもとにカルシユ博士を見よとしたのは筆者が初めてということ、調査には縁者の皆さんがこれまで全面的に協力してくれた。

折しも、昨年は筆者が総務理事を務めるドイツ学術交流会(DAD)の留学生会でもドイツ関連の行事を重ね、去る六月十六日にはドイツ学術交流会創設七十五周年記念式典が、東京ドイツ文化会館でドイツ大使ケストナー博士(Dr. Kestner)、東京事務所所長リンス博士(Dr. Lins)、文部事務次官佐藤禎一氏の臨席の上で催された。

併せてデュースブルグ大学のアモン教授(Dr. U. Amon)の記念講演およびシンポジウム、元留学生音楽家による音楽会を行った。六月二十七日にはドイツ大使公邸に招かれ、その折これに触れたところ、七月になって、調査激励と成功を祈る手紙を戴いた。

ところで、ドイツ学術交流会を創設し、ドイツが世界と本格的な学術交流を始め、大正十四年は奇しくもカルシユ博士が来日した年でもある。D A A D創設七十五周年の本年はドイツでは周知のように「日本年」にあたり、特に日本との関係を重視した催し物がドイツ各地で行われた。日本をこよなく愛し、多くの人材を育成したカルシユ博士は戦中・戦後の混

乱時に埋もれ、殆どの日本人がその存在すら知らない状況にある。筆者がカルシユ博士を知ったのは全くの偶然であるがこのように状況が熟している今こそ、カルシユ博士を正しく知ってもらおう好機であると思う。しかし、これらの中には関係なく、前述のようにただひたすら彼の業績と日本における功績のみに注目した顕彰を行い、後はそれを知った人々の判断と評価に任せるべきかと思っている。

第二章 筆者とカルシユ博士の出会

シュトゥットガルトのとある小さなホテルでの一九九九年九月五日朝のこと、



二〇〇〇年六月十八日、トイン学术交流会 DAM

設立十五周年記念式場にて

左からリンス DAD 東京所長、通訳、五川 DAD 留學生会会長

ケスター、駐日ロイス大使、佐藤文部事務次官

カルシュ博士の霊が偶然にも、筆者を導

健爾博士とも相談して、同日に週末休暇を利用して、筆者自身も未だ訪れたことのないこのシュトゥットガルトの街に足を踏み入れた。その日の宿を決めてなかった我々は中央駅のインフォメーションで二軒の安価な一晩九〇マルクの小さなホテルを紹介してもらった。どちらにするか、ちよつと迷ったが、こちらを指して、城内公園 (Schlossgarten) の近くに宿をとつたのが、この運命の出会いの始まりであった。そのホテルの名はホテルアムフリーデンプラッツであった。

³ Fri eder un ya to と出会う場所が Fri ederplatz で、その名称が不思議なくらい一致していた。また、彼女の日本名は Eyer の、編者の名前は Heiderostl である。ずつと後で気がついたことであるが、ここにもやはり

いてくれたことが彼との最初の出会いの機会を用意してくれた。カルシュという名前は筆者にとっては全く未知で、聞いたことも、見たこともない名前であった。当時、筆者は、二十年來の親しい友人であるテュースブルグ大学のフランク教授が大会長を務めるカールスルーエでの第三回ヨーロッパ制御会議の国際プログラム委員として、また「呼吸循環制御」と「眼球運動」に関する発表と座長の任を無事に務めて、会議に別れを告げたところであった。せっかく同行参加した同僚の張 晁林博士と室蘭工業大学の高原

² 専門は互いに異なるが前出の Prof. Dr. U. Anton と Prof. Dr. P. Eyer は同じ大学に勤務し、親しい関係にあることがわかった。ここではも人の縁の不思議さを感じます。

この日の三人での Gaststätte での昼食はいろいろと話題が弾み、とても楽しかったこと、鶏の丸焼きがとてもおいしかったことを覚えてる。街のあちこちを見物する前であった。この日は丁度、州知事の誕生祝いがあり、官邸の広場で楽隊の行進と演奏に幸運にも遭遇し、土地の人とも親しく語り合うこともできた。さて、問題の翌朝は仕事の準備もあつて

彼女の父 Eyer の意志が感じられた。何という偶然であろう。私とカルシュ先生との出会いに幾重にも偶然が働いていたのだ。

のコーナーに壁を背にして座った。彼女が食事を始めたとき、私たちは丁度食事を終え、この日の予定を勿論日本語で語り合っていた。そのとき、彼女がふと私の方をみて微笑んだ。私が気づいてそのわけを尋ねると、大部分は忘れた日本語の響きをとて懐かしく感じて、自然にそうなったとのことであった。彼女はマールブルク⁴に在住の地理学と政治学を専門とする Frau Dr. Friederun Ornstadtschであることがわかった。懐かしい松江、横浜、東京、軽井沢でのかつての

⁴ Frankfurt am Main の北八〇キロに位置する宗教と学問の都市。ライン支流 Main に沿った古都である。Bischofs Kriemhild はドイツ最古のゴシック教会で唯一の聖地となっている。図書館の豊富な大学町として有名な、カルニユの学んだ縁の地である。

一九九九年九月五日シュトゥットガルトのホテルでフリーデルンさんと編者



(Hotel am Friedenplatz)



七時頃であっただろうか、階下のダイニングルームで三人で朝食を摂っていた。すると、上品な婦人が私の左斜め向かい

暮らしをかみしめるように語ってくれた。そして父君が一九二五年から一九三九年まで旧制松江高等学校で教鞭を執っていたとのことへと順に話題が進展していった。しかし、残念ながら私たちの出発の時間も迫り、お別れしなければならず、再会を期して写真を取り、住所を伺って別れた。そのとき、低解像度設定のままのデジカメで写真をとったので、後でその出来映えを見たときにちょっと後悔したが、後の祭りであった。

帰国後、約束の写真をフリーデルンさんに送ったところ、返事にカルシユ博士の履歴と業績の概略が届いた。戦中、戦後の混乱時に紛れて彼の業績が散逸し、日本では十分に時間がとれず、その後ドイ

ツに戻る機会があってもなおまとめるに十分ではなかったことが推測された。

話に興味をもった私は、松江市役所と島根県庁、島根大学に問い合わせたが、同博士に関する具体的情報は殆ど得られず、私も多忙で、彼女とはクリスマスにカードを交換しただけであった。ただ、関連する史実と人名の確認を細々と行っていた。年が改まり私の周辺に種々事情が生じたこともあって、その前後に十分に時間がとれなかった。しかし、折しも開催されたフランスでの遠隔医療国際会議に参加・発表時に、時間をみてドイツに立ち寄り会おうとしたが、やはり時間がとれずこれを断念した。帰国後の四月にや

つとこの件に本格的に取りかかることができた次第であった。その後フリーデルンさんから紹介されたお姉さんのメヒテルト⁹さんに電話と手紙で接することができた。これから得られた情報をもとにして、かつてのカルシユ先生の生徒と縁者の何人かに接触できた。あとでわかったことだが、一九六八年にカルシユ氏が同窓会から招かれて以来、彼女が共に旧交を温めていた数人の住所をアルファベットの形で紹介してくれたのだった。そのなかで国内のカルシユ氏に縁のある最

⁹ 彼女は自分の名をメヒテルトと書き、署名にも使ったことがある。カルシユ博士は「おまエニユ」幼名友達はメヒテルトと呼んでいた。二〇〇〇年十月に酒井勝郎氏が自宅で面会したとき、彼はメヒテルトとよんでいた。英語圏では「O」の発音が困難なので、アメリカでは日常は「Oriental Name」の「Aria」と呼称している。

初のキーパーソンである酒井氏、増田氏、白石氏、遠藤氏、江上氏に連絡をとることができた。もちろん、住所もアルファベットなので、まず対応する日本語を調べ、さらに電話番号を調べ電話をしたのが実質的な調査の開始であった。酒井氏からは好意により後に『カルシユ先生大私家本』のコピーを頂いた。この頃、出雲と松江に直接赴いて何を知ることが可能かを検討するようになった。現在の島根大学の図書館を通じて、古い職員録を見出し、そのときはじめて、私はカルシユ氏が本当に松江で教鞭を執っていた客観的証拠を得ることができた。増田氏の紹介もあって、竹原氏と会ったのはそうした中であつた。奥谷町の自宅で面会す

ることができたが、当時の松江高校の同窓会に関してまったく予備知識のない私には把握できないことであつた。カルシユ氏の住んでいた奥谷町の洋館の前で竹原氏と写真をとった。後になって関連資料を手に入れ、この洋館に個人的に特別に興味を持っている人がいることやカルシユ氏周辺の同僚ウッドマン氏との関係がわかった。ところで同窓生の資料を探して提供してくれたのは芦屋の白石氏であつた。ある集まりで彼が私の話をしたのがきっかけで、見も知らないひとから手紙や資料を受け取ることができた。この方を通じてさらに岡崎、宮田、奥野氏らの紹介があつた。また、同窓会長の中村氏、また澤田、田島、松本、藤田氏な

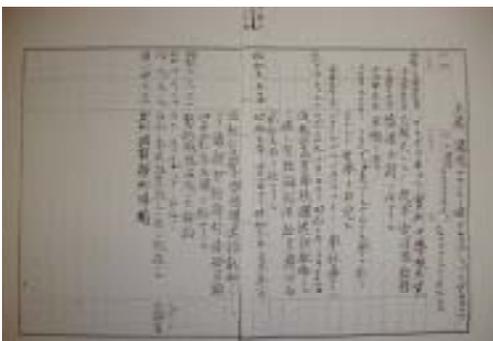
どこからも元気でお過ごしの子の生徒の経歴などの情報を得ることができた。このころ、同時にメヒテルトさんからは次々と事実を明らかにする手がかりを得て、彼女が提供するすべての資料を公開することを任された私は、カルシユ先生顕彰発起人会設立と将来の計画立案のために白石、宮田、岡崎、奥野の四氏と芦屋で会った。カルシユ博士は戦前松江高等学校でドイツ語、ドイツ文学、哲学の教鞭をとっていた。一九四〇年からはドイツ大使館に勤務し、西国の友好関係に尽力した。娘が二人あり、そのうちの一人が上記の Frau Friederun Karisch (日本名 ひで子) で、現在ドイツのマルブルクに住む科学者である。もう一人は Ms. Nachtlid

G. Gar (日本名 ほしこ) で、現在アメリカ合衆国テネシー州チャタヌガ (Chattanooga) に住んでいる。一九三九年帰国してから一九四〇年再度来日して横浜 (一九四〇～四四年)、東京 (一九四四～四五年)、軽井沢 (一九四五～四七年) に居住したとのことであった。

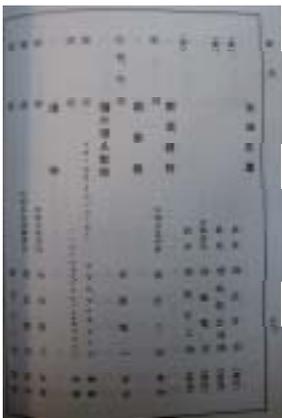
妹さんからは時間がなくて十分に話を聞けなかったが、何回かお姉さんと直接電話で話すうちに、父君の残した資料と絵画、松江の写真およびかつての生徒とその縁者の資料を保管していることがわかった。日本では圧倒的に小泉八雲氏のことと顕彰されているが、カルシユ氏の

⁹ Nachtlid は一九二八年一月二十七日生まれ、Friederun は一九三七年四月生まれ。

十四年に及ぶ滞在期間から言っても、松江や松江高等学校で果たした業績は大きいものがあると推測された。おそらく経済的混乱や戦中・戦後の混乱期に当たり、彼の足跡を記録として留めおくことができなかつたからと思われる。彼の足跡を明らかにし、故人の縁者が元気なうちに埋もれた彼の功績を明らかにしたいと思ひ、独自に調査をした結果、カルシユ氏が当時の日本を深く愛し、日本の人を慈しみ自分の持てる知識を惜しみなく生徒に伝えたことがわかった。このことを広く日本の人々に知らせてあげたい。また彼の日独友好の努力の証を明らかにし、さらに発展の礎にしたいと思っている。彼の履歴についてはフリーデルンさんが



日本語で書かれたカルシユ氏の履歴書
(島根大学所蔵)



松江高等学校一覽のなかにカルシュ博士の姿を見る(鳥根本学所蔵)

得たものを翻訳したのが調査に役だった。また、長女メヒテルトさんと先生の直接・間接の旧生徒から得られた情報と、外務省、宮内庁、文部省および関連機関、図書館を利用して得た情報をもとに、ほぼ正確に知り得た部分について、まとめてみた。

第二章 フリッツ・カルシュ博士の生涯

フリッツ・カルシュは明治二十六年二月十九日ドレスデン近郊のブラゼビッツで生まれ、昭和四十六年十一月十八日にカ

⁷ Fritzの父は Harann Kar Schr. 母は Luise Karis'.

ツセルで没した。父ヘルマン、母ルイーゼである。三人兄弟の末子として生まれた。彼は、大正十四年より十四年間にわたり旧制松江高等学校で教育に力を注ぎ多くの人材を育てた哲学者であった。また日本の哲学や宗教の研究家で、昭和十五

日 Augustin von Mackenzie で大規模な食肉業を経営、共同で立てた右造りの建物の主要部分は父の一九〇一年の死後に入手にわたる。彼は三十四歳の時エルベ河でおぼれかけた。そのとき名もない労働者に救われたことである。九歳の時盲腸から腹膜炎を起し生命の危機に陥った。彼の長姉 Elisabeth は乳児の時死亡、次姉 Emma はオーストリアで結婚し、三人の子供があった。子孫は健在。一九三九年と一九四〇年にメヒテルトは祖母ルイーゼに会っている。(メヒテルト談)。⁶ Fritz は Augustin Mackenzie で生まれた。長女は半後直ぐ死亡、次女がフリデル。ドレスデンはザクセン地方の首都でエルベ河ほとりの優雅なハロツク調の芸術都市である。Emma はグリム兄弟で有名な Grimm 王国の首都、美術館・博物館が多い。

年から五年間にわたる知日家外交官でもあった。彼の薫陶を受けた著名人には池田、佐藤内閣の自治相の赤澤正道氏⁷、「長崎の鐘」で知られている元長崎医科大学教授の永井隆氏⁸などがある。もちろん、彼の門下には高齢ではあるが健在の各界著名人を多数見出すことができる。彼は明治四十四年ドレスデンにおける国際博覧会で「日本」と遭遇した。故郷の理系ギムナジウム学校を大正三年に終え、ドレスデン工科大学に入学した彼は半年後の第一次大戦では志願兵、電信隊勤務であった。大正六年に予備少尉、大正八

⁶ 赤澤正道(鳥取出身)(四期文之昭和二年卒) 東大卒業院議員、池田内閣、佐藤内閣自治相、昭和五十七年逝去。
⁷ 永井隆(鳥根出身)(五期理之昭和三年卒) 長崎医科大学元長崎医科大学教授、昭和二十六年逝去。



ブラゼウィッツ・シラー・ブラッツの
フリッツの生家

年には軍役を退き、その後マールブルク
大学でニコライ・ハルトマン門下として
哲学を学び、大正十二年に哲学博士の学

位を取得した。さらに歩を進め人智学の
研究組織に加わった。大正十四年日本と
の縁からドイツ語講師として運命の地の
松江へ赴任することになった。同年十月
彼はプラーゲ氏の後任として旧制松江高
等学校に着任した。その後何度かの備後
契約し、昭和六年四月〜七月に一時帰国
の間、ハーマヘル⁵¹氏が教鞭を執ったが、
同年九月再び採用され、昭和十四年三月
契約満期に、シュウアルベ⁵²氏と交代し
帰国した。この間、英語教師のウッドマ
ン氏を隣人とし、松江市奥谷町官舎⁵³に

住んだ。妻エンメラ（明治二十九年生）と
の間には、長女メヒテルト（昭和三年生）、
次女フリーデルン（昭和十二年生）があり
⁵⁴余暇には愛する松江や周辺の田園を
精密に描写した。彼の描いた六道湖、嫁
が島、袖師が浦、大山、山陰の農村の風
景画が保存されている。また当時の松江
の貴重な写真を数多く残している。彼が
任地の松江で若者にヨーロッパの精神を
伝えながら、同時に自らの精神生活を磨
きあげ、自分のライフワークである人智
学的にみた東洋哲学史の膨大な未刊行原

稿を残した。当時の日本を深く愛し、日
本の人々を慈しみ、自分の持てる知識を
惜しみなく若者に伝えたカルシュの著書
にはカントとハルトマンの比較論述（日
独文化協会、昭和三年）があり、その他
ドイツに関する著書（同協会、昭和九年）
も出版されている。同僚の高橋敬視教授
によるハルトマンの著書の翻訳は彼の紹
介と協力によるものであった。同博士に
関しては、門下の酒井勝郎氏が「田舎の
大学から」（私家版、昭和四十四年）、「カ
ルシュ先生」（私家版、昭和五十五年）で
記述し、同窓会誌「翠松」や旧制松江高
校史の「嵩⁵⁵のふもとに」でその人柄を

⁵⁰ 〇年以後は独身職員宿舎として使用されているが老朽
化著しく、現在の居住性は極めて劣悪である。
⁵¹ 夫妻の長男。一九三五年生まれの Göttrid Herman
Johannes Yohti ndu Kai sch (1935.9.3.-9.10) は主
後一週間で死亡した。多田教授の名前つけた（メヒテル
ン下談）

⁵² 高山（標高三六メートル）に由来する。松江の東
中海の近くに聳える山。高山は高い山を意味する。今
はキャンパスに高層建築が立ち並んで視界を遮って

旧生徒が語っている。

昭和十四年帰国当時に予備役将校であった彼は戦場を避け、彼と親交があったドイツ大使オット氏の仲介によって大使館付副武官として昭和十五、二十年まで国会議事堂近くのドイツ大使館に勤務した。家族は昭和十五年春から昭和十九年九月まで横浜山手町の米国人フレイジャーの

るが、昔は周囲一面が田圃で民家が少しある程度で、学生寮である自習寮の丘からの見晴らしはよく、和久羅山・樂山とともに、乙女が仰向けに寝た姿に見立てて、昔から寝佛（ねぼとけ）と呼ばれていた。松江高校生はメッチェン山と呼んでいた（竹原敏夫氏による）。因みに同じ漢字を当てる高山（すこうざん）と呼ばれる中国河南省洛陽の東にある中国五嶽の一つの名山がある。また、同名の人物がいる。鎌倉末期、南北朝時代の臨済宗の僧であり文人である。一度中国（元）に渡り、南禅寺、円覚寺に住した。五山文学の代表的人物で著書に「高山集」二巻ある。

家に住んだ。その後暉峻凌三氏⁹⁾の斡旋

で東京世田谷区に元国際連盟派遣代表であった鮎澤巖氏所有の和洋折衷の家に居住した。昭和八年から毎年夏には、軽井沢の別荘で過ごし、昭和十五年の夏は、今上陛下が皇后陛下と出会ったテニス場のすぐ近くに住むことになった。翌年からはハツピーバレーの別荘で過ごし、昭和二十二年八月に夫妻と次女が帰国した。彼の未発表の研究は哲学史と人の意識の進化に関することである。ドルナツハの「ゲーテアヌム」に収録された彼の未刊行原稿は後に家族の許に戻されている。

⁹⁾ 暉峻凌三（東京出身）（十四期文二、昭和十一年卒）
東大文 哲学卒 元太学教授 平成四年逝去

原稿は解読困難であるが、古代のインド、中国、ギリシャの哲学から始まる一冊約四百頁余のファイル三十七冊を整理中である。全体に流れる彼の意図は有史以来人の思考が、すなわち、哲学がどのように変化してきたのかを示すことであって、彼が大きな興味を抱いていた禅と西田哲学への入り口がやがて明らかにできるはずである。彼はまた、資料の中で、学問や内的修練を通して、シュタイナーが唱えた新しい思考に我々が如何にして到達できるかを示そうとした。彼の大部分の仕事はシュタイナーの哲学が如何にカント哲学に勝るかを示そうとしたことにある。彼自身が自らを称して行動的人智者者でありシュタイナーの「精神科学」を

世に広める教師であると言っていた。彼の娘達は人智学の基本に関する影響を両親から受けた。後に長女は自らその研究を行い、次女は帰国後自由ヴァルドルフ学校¹⁰⁾に通い、マルブルク大学で学び、同じヴァルドルフ学校の教員になった。昭和二十二年ヘッセンで生活基盤を整えたカルシュ博士はマルブルク大学神学教授ハイラー博士を通じて、戦後宗教学者として活動の三笠宮崇仁殿下との親交をもった。昭和三十六年には病気のため年金生活に入った彼はキリスト共同体の古巣のカッセルに移住し、ライフワー

¹⁰⁾ 起源は一九一九年代であるが、戦時中は禁止された。しかし戦後に復活し、一九八〇年代には世界各地に創られた。

クである人智学からみた東洋哲学史の研究に専念した。その後、音信が保たれていた旧生徒から昭和四十二年に招待を受け、翌年秋に日本各地を訪問し多くの旧生徒と親しく過ごすことができた。このことは一部新聞でも報道された。その際に彼は出雲大社で、至聖の神々に対面する願いが叶えられ、ここで自らの天命に対して神々に感謝の言葉を述べることができた。一ヶ月の滞在後に帰国した彼は金婚式を昭和四十五年に祝い、翌年脳腫瘍で亡くなった。彼は少年期に夢見た風景と全く同じ風景を松江周辺に見ることができたことを自らの人生の終末期に、周囲の者によく語っていたとのことである。

第三章 カルシユ先生の足跡

三・一 日本との出会い
フリッツは一八九三年二月十九日父ヘルマン母ルイーゼの間に生まれた。姉がフリーデル、祖父がヴィルヘルムである。一八九九年春ブラゼヴィッツの町民学校入学し、一九〇三年に王立ドレスデン・ノイシュタットのギムナジウムに進んだ。翌一九〇四年からブラゼヴィッツのギムナジウムクラスに転校した。一九〇六年からブラゼヴィッツの自然科学系ギムナジウムに進み、その後大学入学資格のアビテュア(バカロレア)に一九一四年に合格した。このときの学校の年報告が残

っている。ヘルマンは一九〇一年に肺炎で死んだ。
フリッツは一九一一年ドレスデンの国際博覧会で日本に遭遇した。このとき、博覧会で日本人担当者から黄金のカフスを手に入れており、終生大事にしたとのことである。これを契機にラフカディオ・ハーンの著書に出会い、その著書を集的に読むなかで日本に大いに興味を持った。
一九一四年春ドレスデン工科大学に通い始めた。しかし第一次世界大戦勃発すると同年十月八日から一九一八年十二月三十一日までドイツ軍志願兵であった。うち一九一七年一月二十七日からは遠隔通信部の予備役に着いた。

彼は、戦後の一九一九年春から哲学を専門、自然科学を副専門として、マルブルクで学業を再開した。ここで、後に妻となったエンメラ・アクセンフェルトと出会った。一九二〇年にはフライブルクでハイデッガーやフッサールの講義を聴き精力的に学んだ。

一九二〇年十二月二十八日に結婚、翌一九二一年からバイセンベルガー通りに居を定めた。その後マルブルク大学でニコライ・ハルトマンの門下生として哲学を学び、一九二三年学位を取得し、その間マルティン・ボルヒャルトを通して一

⁸⁰ Emmaは一八九六年十月三日 Gosslerで生まれ、一九七八年八月四日 Berlinで没した。彼女はユダヤの血が四分の一混っている。伯父は著名な眼科学者 Dr. Arent Adolph (増田氏、メモリアル談)

一九二一―一九二二年に人智学を学んだ。この時期は、ドイツの未曾有のインフレのために適当な就職先も無く、彼の生活は貧窮状態にあった。ラフカディオ・ハーンの影響をすでに大きく受けていたと思われるこの時期に同大学の日本人学生である長屋喜一氏と鹿子木貞信⁶氏に出

⁶ 彼等とはともにマールブルクで学生の頃ドイツ語をカルシュ氏より学んだ。カルシュ氏は後に「ハルトマンの哲学」を長屋氏と共同執筆。禅師であったので禅でのつきあいをもった。戦前一度横浜を訪ねてきた鹿子木貞信（かのこぎ・かずのぶ）文学博士（一八八四年十一月三日―一九四九年十一月二十三日）であるがどの程度の付き合いがあったか不明である。一九〇四年海軍機関学校、一九〇七年米独留學哲学東帝大講師、一九二六九年大教授、一九二七年ベルリン大教授、ベルリン日本人倶楽部の右翼指導者、言論報国会事務局長、戦後A級戦犯容疑者、大アジア主義を提唱し大正七年には大川周・北一輝・埤利彦・満川龜太郎・中野正剛らとともに、左右両翼の思想家が結合した老社会を結成した。参加者は実業家や軍人にもいた。自由

会い、ドイツ語教師を求めている和歌山か松江に行くことを勧められた。この出会いはカルシュ氏にとって彼の一生を決める極めて重要な意味をもつものであつ

党で活躍した大井憲太郎や佐藤綱次郎中將も参加したこの会について、木下半治氏は『日本左翼の研究』（現代評論社・一九七七）で「旧式な国粋主義運動から新しい近代国民主義ないしファシズム運動に転換する第一歩」と述べた。後に老社会を母体に北一輝が中心となつて創立した猶存社（大正八年）に参画し、経倫学盟（上杉慎吉博士と、埤利彦門下の高屋素之の握手によつて結成された左右合作団体）の流れをくむ愛国勤労者党の顧問にもなつた。愛国勤労者党の綱領は、（一）非搾取国家の建設（二）産業大権による国家統制（三）諸勤労者の利害調和（四）持権政党及び無産政党の克服（五）人種平等、資源衡平に基づく国際主義の確立などであつた。また、戦争中は大日本言論報国会で活躍。昭和十九年発行『思想戦大講義』収録の鹿子木論文「日本思想戦の神髓」で「承詔必謹」の必要性、日本皇道世界観と自由主義的世界観の違い、などに對する論理メヒテルトは再来日の時に長屋氏と羽田空港で会つた。（メヒテルト談）

た。その後、長屋氏は何度か旧交を暖めるためにカルシュ氏を訪れている。日本での第一歩は訪問記録から見ても、一九二五年九月二十八日であつたと思われる。

八雲立つ 出雲のそら 此あした
雪深くして 風吹き 渉る
昭和二年一月二十四日 長屋

軽井澤 ？？杉の下？？て
北欧の夏の 森を偲びぬ
みずがかる 信濃の吾に はるばると
みつめれど 浅間は見えす
昭和八年八月十三―十七日 長屋

その昔に学びし この町に
また訪ね来て 共に語りぬ

一九六七年九月七日夜
日本に帰る前夜

四十数年前を回顧しつつ 長屋

三・二旧制松江高等学校ドイツ語教師
として

一九二五年十月に月額俸給四百二十五圓でドイツ語教師として採用され、一九二八年三月備後契約を結んだ。俸給は変わらず前と同じ額であつた。一九三二年三月契約満期解約となり、同年四月―七月に一時ドイツ帰国したが、同年九月奏任に準拠採用され、その後一九三四年五月

とは異なり、移転以前のものである。

また写真が好きで、戦前の松江が記録されている写真や当時の高校生の写真をかなり残している。



穴道湖 嫁が島風景

に奏任五等以上準扱扱いで再採用されて、一九三九年三月、契約満期の解約になり、帰国した公式記録がある。彼の住居は松江市奥谷町官舎であった。一九三七年四月復活祭の期間に火災に遭遇したが、日本人の助力により鎮火した。そのときの印象がますます日本を好きにしていたようである²⁸。出火原因は隣人の英語教師ウットマン（Harald Wodman）氏のお手伝いさんの火の不始末であった。ウットマン氏は一九三三年四月〜一九四二年三月に日本に滞在し同じ旧制松江高等学校で英語教育を行ったが、戦争のため米国に送還された。彼の妻ヒデは日本人でモニカとエレナの二人の娘がいた。人智学²⁹

²⁸ メヒテルトが後年何度もいろいろな人に語っている。

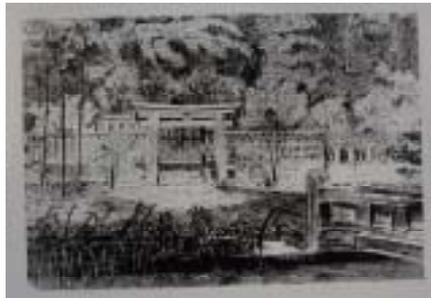
をとともに信奉していたカルシユ夫妻の心配どおり、人智学はドイツ第三帝国で問題になり一九三四年には関連学会は禁じられた。同夫妻はメヒテルトの将来と今後の教育を心配して一九三九年にドイツに帰国する決心をした。彼らとシュタイナーとの学術的な関係は人智学の発展過程との関連から当然と推定された。

彼は画家があり、パステル絵画をたくさん描いた。例えば当時の穴道湖、嫁が島、袖師ヶ浦、大山、山陰の農村風景の絵がある。

以下は、彼が休日に、自ら描いたパステル画の写真である。非常に精密に描かれている。袖師ヶ浦の描写は、現在の風景



袖師が浦地藏 現在は玉造道路開通りに移設



月照寺(藩主松平家の菩提寺)



大橋川に浮かぶ帆かけ船



徳島山崎の船 / 徳島山崎の船



墓地

三・三 外交官として

フリッツは後にドイツ大使となった大使館付陸軍武官のオット (Eugen Ott)

と親交があり、オットはフリッツが軍と一緒に働くのを良しと想っていたようだ。彼は軍の内部にあつてナチスからは比較的毒されない位置にいた。それゆえ家族はアメリカ経由で一九三九年の春にドイツに戻り、彼は予備役に入った。約半年余の後、ポーランドの侵攻戦争が終わった頃、彼はベルリン防衛軍の司令官の許へ出頭命令を受けた。彼はオット大使の要請もあつて、家族とともに日本に戻る旨を言い渡され、東京の大使館付副武官として、外交通過許可証をもつて、ロシアと満州を経由して東京に赴任した。これよりすなわち一九四〇年から終戦までドイツ大使館に勤務することになった。当時のドイツ大使館は 国会議事堂から

道路を横切った位置にあり、空襲を受け一九四五年四月後半に消失した。家族は同年五月前半に軽井沢に疎開した。そして、八月にラジオを通じて天皇の有名な降伏宣言(玉音放送)²¹を聞いたことであつた。

第四章 家族との生活

四・一 メヒテルトの言葉

私にとつて人生の最も長い期間を日記に書き留めおきました。従つて、今日まで私が何時どこで何をし、しかも特定の時

²¹ メヒテルトの立場からの英語の表現は You can imagine our relief when we heard the famous surrender speech by the Terno in August over our radio. Right?

間にごにいたかを容易に検証することができます。私はもはや若くはありませんが、私の記憶は神の加護により今日に至るまで難を受けることなく、それどころか、全く逆に私の誕生以来私が日本で過ごした二十一年間に起こつたことを幾百度となく思い出しましたし、いつでも記憶に呼び起こすことができます。私は何枚かの写真を同封しました。そのうちの一枚は父と母の写真です。これは一九七一年の九月に撮影したものです。父が手術不可能な脳腫瘍と診断された二週間前に撮影したものです。母と私はよく似ており、私が髪を染めず白髪になつてからはとくにそのようです。²²

²² これはメヒテルトさんから編者宛てた手紙の一部

四・二 松江での生活

子弟教育は家庭教師の山根夫人によった。日本語家庭教師は中村フネ子さんで、赤川姉妹は近所の友人であった。メヒテルトの幼馴染みに宮崎県に住んでいる東史（六九歳）さんがいる。錦織君栄さんはメヒテルトが乳児のころの保母さんであり、メヒテルトは彼女を「日本の母」として慕っていた。彼女は何度父フリッツと千鳥城（松江城）に登ったかわからないと言つ。人力車にもたくさん乗り、近隣を旅行した。和歌山など遠距離も旅

翻訳したものである。写真は第十四章カルシュ先生の追悼に掲げている。
※これらの人とは平成二年にメヒテルトが来日したときに再会している。



一九三八年頃奥谷町官舎の前で

四・三 横浜・東京での生活

横浜での生活は日本に根ざした生活とは異っていた。フリッツは毎日大使館に通勤した。そこではもちろん職務上東条内閣時代の軍司令部の高官としばしば接触

行したことを憶えている。毎年夏には六週間近くの休みを利用して軽井沢で過ごした。父は駅弁が好きで、高崎では鰻丼を好んで食べた。しかし、彼女は鰻丼が嫌いであった。フリッツは在日中に日本の宗教との緊密な関係をもつたようだ。高野山での修行の経験があり、また禅師との交流もあつたようだ。そのなかで、金沢出身で仏教哲学者鈴木大拙氏と同郷の哲学者西田幾多郎氏との親交もあつたようだ。戦後鈴木大拙氏がマールブルクに住むカルシュ夫妻を訪ね、旧交を温めたことを示す一九五四年七月二〇日付けの記録が Ostbuch に残っている。

していたようだ。彼は家族には一切その話をしなかったが、東京ベルリン間の通信の暗号化とその解読を行ってきたようだ。すなわち、軍事的諜報活動である。メヒテルトは当時の写真を幾つか保存している。すべては枢軸国間の出来事で、もちろん家族はだれもそれに関与しなかった。東京横浜の山手町四十六Eには一九四〇年春から一九四四年九月まで居住した。住居はアメリカ人の M. Frasier から借用した。メヒテルト自身は一九四〇～一九四四年秋まで大森の東京ドイツ学園に通学し、ここで学んだ²⁴⁾。この家は一九四五年春の大空襲で破壊された。

²⁴⁾ 編者も一九六九～一九七〇年に大森にあった東京ドイツ学園の日本人のための Abendkurs のドイツ語を勉強した。現在は横浜にある。